いとくら
ITOKURA

国際仏教学大学院大学

学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」ニュースレター

第3号
2008.1

特集1　古写経の用の美 ―軸と料紙―

七寺一切経にみる経軸の意匠の相違について／赤尾　栄慶

古写経の色／吉川　也志保

特集2　檀王法林寺

［所蔵古写経紹介］

檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』巻下について／上杉　智英

［寺院紹介］

檀王法林寺／三宅　徹誠

《古写経紹介・その三》

現存最古の大唐西域記写本／高田　時雄

檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』巻下・冒頭部分

今後の活動予定

平成20年度の予定は以下の通りです。

◇公開研究会◇

5月24日（土）、10月11日（土）、11月15日（土）に、国際仏教学大学院大学にて開催予定です。

◇国際シンポジウム◇

12月6日（土）に開催予定です（会場未定）。

◇2008年日台共同ワークショップ◇

11月（日時未定）、台湾で開催予定です。

本学・学術フロンティアのホームページ（下欄参照）にて、講演者・題目等の予定を随時お知らせしておりますので、ご確認ください。皆様のご来場をお待ち申し上げます。

既刊書

○日本古写経善本叢刊（非売品）

第1輯　『玄應撰 一切経音義 二十五巻』

第2輯　『大乗起信論』

○『日本現存八種 一切経対照目録』（非売品）

『いとくら』既刊号

○創刊号

『摩梨支天経』―金剛寺本と敦煌本―／方廣錩

金剛寺経巻の紐／道明新一郎

古写経の死番虫／吉川也志保

寺院紹介・調査日記「金剛寺」「七寺」その他

○第2号

七寺の経蔵／中村一紀

スクロールビューアについて／村川猛彦

金剛寺一切経と安世高の漢訳仏典／デレアヌ　フロリン

天野山金剛寺の浄土教典籍／落合俊典

古写経と微生物／吉川也志保

寺院紹介・調査日記「西方寺」　その他

『いとくら』のバックナンバーを希望される方は、学術フロンティア実行委員会までご連絡ください（連絡先は下欄参照）。

学術フロンティア・スタッフ紹介

研究代表者

今西順吉（国際仏教学大学院大学教授、国際仏教学院理事長）

研究分担者

Hubert DURT（国際仏教学大学院大学教授）

津田眞一（同・教授）

木村清孝（同・学長、教授）

デレアヌ　フロリン（同・教授）

落合俊典（同・教授）

赤尾栄慶（京都国立博物館学芸課企画室長）

高田時雄（京都大学人文科学研究所教授）

梶浦　晋（同・附属漢字情報研究センター助手）

Christian WITTERN（同・附属漢字情報研究センター准教授）

宇都宮啓吾（大阪大谷大学教授）

大倉孝昭（同・教授）

中川　優（和歌山大学教授）

村川猛彦（同・専任講師）

研究協力者

佐藤愛弓（大谷大学助教）

能島　覚（浄土真宗本願寺派宗学院研究生）

三宅徹誠（国際仏教学大学院大学附置国際仏教学研究所非常勤研究員）

林　敏（国際仏教学大学院大学博士課程）

吉川也志保（一橋大学大学院博士課程）

末木康弘（国際仏教学大学院大学附属図書館副館長）

相原良直（華頂短期大学教授）

岡崎友子（就実大学准教授）

広坂直子（京都外国語大学非常勤講師）

上杉智英（中国政府奨学金高級進修生（中国人民大学）、元学術フロンティア研究補助員）

池　麗梅（東京大学東洋文化研究所外国人研究員、元学術フロンティア研究員）

佐藤もな（元学術フロンティア研究員）

研究員（PD）

青木　進・林寺正俊・箕浦尚美・大塚紀弘

研究補助員（RA）

赤塚祐道

（平成19年12月現在）

文部科学省　私立大学学術研究高度化推進事業
学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」ニュースレター

いとくら　第3号
平成20年1月10日発行
編集・発行
国際仏教学大学院大学
学術フロンティア実行委員会
〒105-0001　東京都港区虎ノ門5-3-23
URL　http://www.icabs.ac.jp/frontia
E-mail　koshakyo@icabs.ac.jp
印刷　株式会社　高山

目　次

《表紙写真紹介》
装飾経「中尊寺一切経」の価値 ―― 落合　俊典　（1）

特集1　古写経の用の美　― 軸と料紙 ―

じっくり軸を見てみると…
七寺一切経にみる経軸の意匠の相違について ―― 赤尾　栄慶　（3）

料紙を科学的な視点から見る
古写経の色 ―― 吉川　也志保（5）

特集2　檀王法林寺

［所蔵古写経紹介］
外観だけでなく本文もすばらしい価値をもつ
檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』巻下について ―― 上杉　智英　（7）

［寺院紹介］
一切経を蒐集した袋中ゆかりの名刹
檀王法林寺 ―― 三宅　徹誠　（9）

《古写経紹介・その三》
世界最古の写本が京都興聖寺に
現存最古の大唐西域記写本 ―― 高田　時雄　（10）

《活動記録》
海外の研究者とともに漢訳仏典について考究
国際シンポジウム ―― （12）

日本と台湾の研究者の交流を図る
日台共同ワークショップ ―― （12）

古写経研究の最先端
公開研究会 ―― （14）

《出版物紹介》
院政期浄土教の理解を示す古写本
長寛三年写観無量寿経・保延四年写無量寿経論註巻下 ―― （14）

今後の予定・スタッフ紹介、その他 ―― （15）

いとくら：私たちが調査している古写経を収める「経蔵」からの造語。「経」を意味するサンスクリット語“sūtra”には「いと」などの意味があり、また「経」には「たていと」という読みがあることから、「経蔵」を「いとくら」と読んでニュースレターのタイトルとしました。

檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』巻下・外題部分（右）と見返し絵

《表紙写真紹介》
檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』

装飾経「中尊寺一切経」の価値

落合　俊典

『集諸経礼懺儀』については、本誌7・8頁の上杉智英氏に譲り、ここでは、檀王法林寺所蔵の『集諸経礼懺儀』がその一部として含まれる中尊寺一切経について述べたい。

中尊寺一切経は、奥州藤原氏の初代清衡（1056～1128）が、天治3年（1126）に中尊寺に奉納したとされる一切経であるが、現在中尊寺には16巻しか収められていない。

中尊寺の寺伝によれば、5000巻以上あった一切経は、天正19年（1591）に豊臣秀次が九戸政実の乱を鎮圧した際に中尊寺から持ち出され高野山に寄進されたという。しかし、中尊寺仏教文化研究所所長の佐々木邦世氏は、醍醐寺座主の三宝院義演（1558～1626）の『義演准后日記』慶長3年（1598）6月8日条に、奥州から一切経二部が伏見に届いたなどとあることから、その年の3月に催された醍醐寺での花見の際に、義演が豊臣秀吉に懇願したために持ち出されたのではないかとされている。また、同日条には、高野山出身の木食応其（1536～1608）が一切経一部を高野山へと望んだことも記されている。そのような経緯で、現在の所在は、高野山4296巻、観心寺（河内長野市）166巻などに対して、中尊寺には16巻のみなのである。

さて、その最大の特徴は、紺紙に金銀字で交互に書写されていることである。見た目に優美な装飾経であるが、本誌5・6頁で吉川也志保氏が述べるように、紺紙には防虫という実質的な効果もある。

装飾経という美術的な面で注目を集めてきた中尊寺一切経ではあるが、その文献学的価値はどのようなものであろうか。

本学術フロンティアでは、京都国立博物館所蔵の中尊寺一切経（マイクロフィルム）に関して26点のサンプル調査を行った。その結果、調査した26点中の25点までが、版本一切経系統のものではなく、金剛寺や七寺の一切経などと一致する系統のものであることが明らかになったのである。

近年の筆者の研究などによれば、平安時代後期の七寺一切経4954巻（重要文化財）、金剛寺一切経約4500巻などの大半は、奈良朝写経の転写本を主体としていることが判明しつつある。よって、中尊寺一切経も、サンプル調査に基づくならば、奈良朝写経の転写本を多く含む平安写経と考えられる。さらに既存の京都国立博物館の中尊寺経調査目録のデータによって、概略、奈良朝写経の転写本と推察できる。

したがって、中尊寺一切経を大正蔵の校勘に用いるならば、奈良朝写経が基づいた『開元録』入蔵録1076部5048巻の一切経の復元のみならず、平安写経が基づいた『貞元録』入蔵録1238部5351巻の一切経の大半が復元可能である。唐仏教の基本テキストに最も近接した仏典を見るには、従来の刊本一切経では不十分である。なぜなら、刊本一切経と写本一切経には、本文や構成に看過できない相違があるからである。唐代のテキストを伝える敦煌写本には一切経の内3割前後しか現存せず、全体像を見るには日本の奈良・平安写経が必要である。中でも中尊寺一切経は、貞元入蔵録中の8割の経典が現存する上に本文の厳密性も高い。中尊寺一切経は、東アジア仏教の基本テキストを復元できる優れた価値を有するものなのである。

（本学教授）

特集1

古写経の用の美 ―軸と料紙―

じっくり軸を見てみると…

七寺一切経にみる経軸の意匠の相違について

赤尾栄慶

漢訳仏典の集大成である一切経（大蔵経）所収の典籍には、大乗の経・律・論や小乗の経・律・論と賢聖集というような部類分けがある。

平安時代後期十二世紀を代表する一切経の遺品である「七寺一切経」に関しては、その『貞元録』巻第二十九・巻第三十に、

大乗経六三七部一三八三巻二一四帙
大乗律　二七部　五五巻　五帙
大乗論　九九部　五二〇巻　五〇帙
小乗経二四〇部　六一八巻　四八帙
小乗律　五四部　四四六巻　四五帙
小乗論　三六部　六九八巻　七二帙
賢聖集一四五部　六三一巻　六七帙

とあって、合計で一一三八部五三五一巻五〇一帙となっている。しかし、帙数については巻第二十九の標挙では四九九帙となっていることから、二帙の相違が見られる。これらに続く『貞元録』巻第三十の末尾には、入蔵録に続いて入蔵されなかった経典類を列挙している「不入蔵録目」が付されているが、これらも実際には書写されて、「経櫃内蓋所載目録」にあるように五七六八巻の経巻が書写されたと思われる。

ところで管見の及ぶ限り、数ある一切経の中で「七寺一切経」のように、界線の色の違いや種々異なった意匠の軸などが付された一切経を知らない。それらに関しては、以前に「古写経史から見た七寺一切経―書誌学的アプローチを中心に―」[1]の中で述べたが、それらを含めて今、まず簡単に書写の形式に見られるカタチの相違点を列挙してみよう。

まず、「七寺一切経」の特徴の一つである朱の界線であるが、一切経の首位におかれる『大般若経』六百巻については縦横いずれの界線も朱で引かれているが、それ以外では天地の横界のみが朱で引かれている。中国・北宋時代の写経に『大般若経』のような朱の界線を用いている例があることから、おそらく、このような朱の界線は中国・北宋時代の写経の影響を受けていると見られる。

表紙には、華瓶文様と外題用の二重匡郭を摺りだし、濃い茶渋色の染めた蝋箋を使用している。そして、外題は『大般若経』と「五部大乗経」とされる六十巻本『華厳経』・『大集経』・『大品般若経』・『涅槃経』―『法華経』は散逸か―などの外題が金字で書写されているが、それ以外の諸経典は銀字で書写されている。

そして、問題の経軸であるが、先述の論文の中では次のように書いたのである。

（軸）合せ軸で、材は杉とみられる。軸端は棗型朱頂軸や黒漆の上に金箔を押すものなどがある。現在のところ、その意匠の違いに何か意味があるかどうか不明である。[2]

一応、経軸、中でも軸端の意匠に相違があることは承知していたが、これまで、それに何か意味があるかどうかまでは検証する機会を持たなかった。それがこの学術フロンティアの事業の一環として、京都国立博物館でお預かりをしている一百巻全巻のデジタル撮影を行うことになった。調書を取るためや撮影の便をはかるために、それらの経巻を並べ替えし、整理をする段になった。そうすると、軸端の意匠の違いに意味がありそうな気配となってきた。それらの軸端を整理すると、今のところ六種類が確認できるようである。

①黒漆に金箔を押す、黒漆塗金箔合軸…大乗経
②側面は黒漆で、軸端断面部に金箔を押す、黒漆塗金箔頂合軸…大乗論
③側面や断面部全体に朱漆を塗る、朱漆塗合軸…小乗経
④軸端断面部に朱漆で梅鉢文様を描く、梅鉢文様朱頂合軸…小乗律
⑤側面は黒漆で、軸端断面部に朱漆を塗る、黒漆塗朱頂合軸…小乗論・賢聖集
⑥黒漆の上に朱漆で蓮弁散文様を描く、黒漆塗朱蓮弁散文様合軸…不入蔵

このように全体的な傾向としては、①の黒漆塗金箔合軸は、『摩訶般若波羅蜜経』や『大宝積経』などの大乗部の経典に付されており、②の黒漆塗金箔頂合軸は、『十地経論』や『般若灯論』などの大乗の論部、③の朱漆塗合軸は、『中阿含経』や『増壱阿含経』などの小乗部の経典、④の梅鉢文様朱頂合軸は、『説一切有部苾芻尼毘那耶』などの小乗律、⑤の黒漆塗朱頂合軸は、『大毘婆沙論』や『弘明集』などの小乗の論部と賢聖集、⑥の黒漆塗朱蓮弁散文様合軸は、『五仏頂三昧陀羅尼経』などの不入蔵の経典、に付されていると見られる。また、①の大乗経の黒漆塗金箔合軸と③の小乗経の朱漆塗合軸には、軸端のカタチが切り離し状のものと丸く面取りをしたものとの二種類が存在するようである。

大乗律の経軸をまだ確認していないので、はっきりしたことは云えないが、大乗経と同じ意匠の可能性が高いのではなかろうか。小乗の論部と賢聖集が同じ意匠となれば、全体では六種類の意匠なのかもしれない。

軸の意匠ごとに集めると、部別の違いが一目瞭然となるわけであり、カタチに違いのある一切経の出現となったのである。何故に七寺一切経がここまでカタチにこだわるのであろうか、興味が尽きない。

今回の軸の意匠の違いに関しては、当プロジェクト研究員の青木進氏が更に詳しく、検証し報告してくれる予定である。

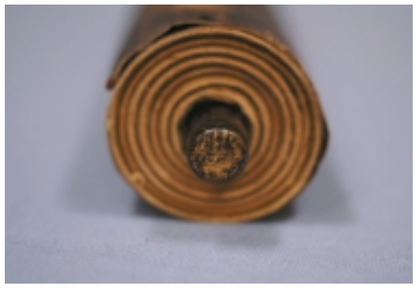
【註】

（1）拙稿「古写経史から見た七寺一切経―書誌学的アプローチを中心に―」『七寺古逸経典研究叢書第五巻　中国日本撰述経典（其之五）・撰述書』（大東出版社、二〇〇〇年二月、七八九～八一〇頁）。

（2）前掲論文七九八頁。

【執筆者紹介】
赤尾　栄慶（あかお　えいけい）
富山県生まれ。大谷大学大学院博士後期課程仏教学専攻単位取得。同大学の特別研修員を経て、昭和59年12月から京都国立博物館に勤務。専門分野は、漢字文化圏で書写された古写経の書誌学的研究。現職は学芸課企画室長。

①黒漆塗金箔合軸


②黒漆塗金箔頂合軸

③朱漆塗合軸

④梅鉢文様朱頂合軸

⑤黒漆塗朱頂合軸

⑥黒漆塗朱蓮弁散文様合軸

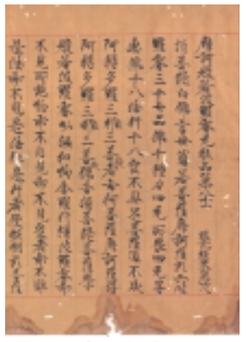
料紙を科学的な視点から見る

古写経の色

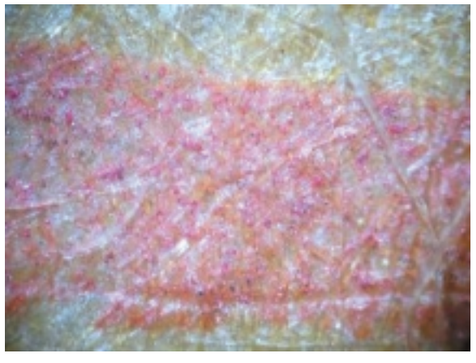
吉川也志保

古写経の彩りを見ると、先人たちの知恵が伝わってくるようだ。料紙と文字色に関しては、赤尾栄慶先生の著作『写経の鑑賞基礎知識』において、素紙経、紺紙経、紫紙経、砂子を蒔いた装飾経、漉返し経などが、美麗な図版と共に詳しく解説されている。そこで、今回は、古写経や紙そのものというよりも色材に着目することとする。

当時、色材として用いられていたのは、天然の染料と顔料だった。大まかに説明すると、動植物から得られる色素を水に溶かして用いるのが天然染料であり、鉱物や貝殻などを砕いた微粒子で水には溶けない性質があるため、普通は油や膠などの固着剤の中に分散させて用いるのが天然顔料であるという違いがある。例えば、クチナシ、黄檗、刈安、茜、紅花、蘇芳、藍、紫根、貝紫などは染料であり、朱、鉛丹、石黄、金泥、銀泥などは顔料に類する。



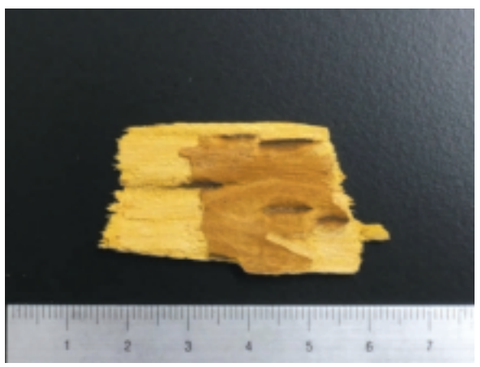
[図1]七寺蔵『放光般若経』巻第二十八



[図2] 地界　朱線部位の顕微鏡写真

七寺一切経の料紙は、黄色を呈しており天地界には朱線が引かれている(図1)。科学的な材質分析を行う機会はなかったものの、顕微鏡で、朱線の部分を100倍に拡大して観察すると(図2)、紙の繊維の上に赤い粒子が確認できることから、これは顔料である可能性が高いことがおおむね視覚的に判断できる。また、この一切経の料紙は多くの写経と同様に黄檗で染められていると考えられる。黄檗(学名*Phellodendron amurense, P. chinese*)は、飛鳥時代以前にすでに用いられていたとされる。各地の山地に自生するミカン科の落葉樹であり、幹の外皮は厚いコルク質で、黄色い内皮の部分を染色に用いる(図3)。黄柏皮として薬用にもなったという。この樹皮の色素であるベルベリン(berberine)は、媒染剤なしでも鮮やかな黄色に染めることができるため、加温した水に内皮の切片を浸すと染色液が得られる。そして、黄檗は、防虫効果がある染料として知られていたため、東洋の紙製文化財には黄檗染の料紙が多く使われている。

黄檗と同様に、紺紙を染めている藍も防虫効果があることで知られている。東洋の藍(学名*Polygonum tinctorium L.*)は、原産地がインドシナ半島とされるタデ科の一年草で蓼藍とも呼ばれ、日本では古く仁徳朝に中国から輸入され、7世紀以前に舶載してきた最も古い青色染料であるとされる。生の葉を揉みこみ染色に用いたのが始まりと考えられ、その後アルカリ性の液で加熱し、還元させることで水溶性の色素が得られることを知り、発酵による蓼染めに改良されたとされる。松田泰典先生の紺屋に関する記述を引用すると、「夏に刈り取った藍葉を寝かし水を加えてかき混ぜながらバクテリアで二ヶ月半発酵させた、蒅(すくも)と呼ばれるものや、泥藍などを藍甕に入れた後、灰汁と小麦粕を加え、さらに消石灰を添加し仕込む。その後、甕と甕との間に火入れし加熱する。一ヶ月ほどで液は緑色となり、表面は濃紺に変わり泡がでる。これを藍建てという。甕の中の水溶性インディゴホワイト(還元状態)の染色液に染める物を浸し、その後、空気酸化により不溶性の色素成分に変化・定着させる。」とのことだ。藍の成分であるインディゴの防虫効果は、ブルージーンズが天然インディゴで染められていたことをはじめ、服飾業界においても広く知られている。藍で染められた紺紙には、金泥や銀泥で書写されている(図4)。こうした染色によって得られる効果は、美しさに加えて、防虫性という実用性を兼ね備えた、一種の「用の美」ともいえるだろう。



[図3] 黄檗

このような染料や顔料に関する綿密な調査を行うには、保存科学という分野で行われている科学的分析手法も有効である。材質の分析は、ごく微小の試料(サンプル)を採取して分析を行う手法と、非破壊的手法とに大別できる。貴重な文化財を調べるにあたっては、後者の非破壊分析が望まれるのだが、試料を採取して分析機器にかける場合に比べると、得られる情報量が限定されてしまう。このため、複数の非破壊分析法を組み合わせたりして、より正確な同定を行えるように最善が尽くされている。また、新たなより精度の高い非破壊分析法の開発等も行われている。そのかいあって、今日様々な文化財に用いられた材質や技法が解明されつつある。

【附記】

七寺一切経調査に参加することを許され、貴重な機会を与えてくださった、七寺蟹江良三師ならびに落合俊典先生に厚く御礼申し上げます。

[図4] 紺紙金銀字大乗悲分陀利経　巻第六（図録『古写経』京都国立博物館、2004年、p.175）

【参考文献】

赤尾栄慶「料紙と文字色」『写経の鑑賞基礎知識』至文堂、1994年

柏木希介・斉藤昌子「染料」『文化財事典』2002年、p.125, p.128

松田泰典「染料」『文化財のための保存科学入門』角川書店、2002年、p.88－105

成瀬正和「顔料」『文化財のための保存科学入門』角川書店、2002年、p.138－152

図録『古写経』京都国立博物館、2004年

【執筆者紹介】

吉川　也志保（きっかわ　やしほ）

東京都生まれ。フランス国立図書館保存部でのインターンを経て、保存環境調査法などを学ぶ。一橋大学大学院博士後期課程に在学。研究テーマは、史料保存の技術と歴史。現在、東京文化財研究所保存修復科学センターの協力を得て、様々な書籍文化財の保存環境を調査中。

【追記】古写経の用の美

平安古写経に見られる特徴

古写経の調査中に実際に触れることのできた経巻の特徴について、経験をもとに紹介したい。

●金剛寺一切経

所蔵されている数種類の『大般若経』の中に、楮紙に書写し古代の様式の紐を用いて他と区別している一群がある。紐については本誌創刊号で道明氏が詳説している。そのように『大般若経』を特別扱いする傾向があるのは七寺も同様である。

『大宝積経』は宿紙――古紙を漉返して使った薄墨色の紙――を用いて書写されている。宿紙には再生する以前に書かれた墨が混じっているので、調査・撮影時に宿紙の経巻に触れていると、指が真っ黒になる。これらの宿紙の巻子は糊離れしている場合が多い。

●七寺一切経

天地界が朱線であるという特徴については赤尾栄慶氏の項に譲るが、それ以外に一切経が収められている唐櫃が特徴的である。それは黒漆塗りで中蓋が付いている。『大般若経』を収めている櫃は中蓋の裏側に釈迦十六善神が漆絵と蒔絵で描かれている。その他の唐櫃では、各櫃に収めた経典名が朱書で列記されてあるが、現在はそれらと中身とが一致していない。

●西方寺一切経

西方寺一切経の調査中、経巻から剥がれ落ちた表紙を収めた入れ物の中に、経帙が混じって入っていた。巻子本用の帙のようであった。分厚くゴワゴワした感触の帙である。表面には千字文が記してあった。

正倉院文書の天平三年八月十日条に「賢愚経二帙十七巻〈先十巻後七巻〉」(『大日本古文書』第7巻19頁)という記述が見られる。これは『賢愚経』全17巻を1～10巻と11～17巻の2つに分けてそれぞれ帙に包んだということである。西方寺の帙も、大体10巻ずつくらいをひとまとめにして包んで保護していたのであろう。

七寺蔵『無所希望経』巻尾

特集2

檀王法林寺

所蔵古写経紹介

外観だけでなく本文もすばらしい価値をもつ

檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』巻下について

上杉 智英

京都市左京区の古刹朝陽山檀王法林寺は一切経蒐集で有名な袋中良定所縁の寺として知られ、古写経に関しては『仏説七知経』(聖武天皇勅願一切経、重要文化財)『頻毘娑羅王詣仏供養経』(藤原夫人願経)等の奈良朝写経を所蔵することで名高いが、ここでは膾炙されることの稀な平安末期写『集諸経礼懺儀』巻下を取り上げ紹介したい。

智昇(~730~)編『集諸経礼懺儀』は諸経典にみられる礼懺儀を上下2巻に集録したもので、その巻下には善導(613~681)撰『往生礼讃偈』が全文収録されており、『往生礼讃偈』の伝播経路の一つとして注目すべきものである。智昇は本書を自身編の『開元釈教録』入蔵録に採録しており、以降本目録が大蔵経編纂の指針として踏襲された為、中国・朝鮮・日本の版本大蔵経や日本の古写経において複数巻の現存が確認されており、檀王法林寺にも上下2巻が揃って伝存している。

本巻は紺表紙に宝相華唐草文様、見返しには釈迦説法図が金銀泥で描かれており、紺紙に銀界を引き金字行・銀字行が交互に書写され、金銅製撥型魚子地四弁花文様の軸端が付される等、善美を尽くした装飾が施されている。奥書こそみられないものの本巻を納めている函には、「紺紙金銀泥　諸経集懺儀二巻　経包玉簾／旧三条悟真寺什宝　亀山帝所賜／以望西楼(以下欠損)」(蓋裏)、「集諸経礼懺儀二巻　美福門院御筆」(側面)と記された和紙が付されており、古経堂養鷸徹定も本巻について「興(ママ)野山荒川経同其製。伝云亀山帝所頒賜也」と『古経題跋』中に記している。

檀王法林寺は開山当初天台宗で蓮華蔵寺と称していたが、浄土宗三条派派祖望西楼了恵道光(1243~1330)が文永9年(1272)に浄土宗に改め悟真寺と改称された。上記の伝に信を置くならば本巻は美福門院得子(1117~1160)発願の荒川経であり、亀山天皇(1249~1305)から了恵に頒賜された代々伝持の什宝という事になる。今、本巻伝来の経緯を詳らかにすることは適わないが、上記の伝において留意すべき点は「本巻は荒川経ではない」ということである。

荒川経は平治元年(1159)、美福門院が鳥羽院の菩提を弔う為、高野山に六角経蔵を建立し奉納した紺紙金字一切経である。檀王法林寺所蔵の本巻は荒川経同様紺紙経であるが、その本文は金銀字で交書されており、その様式から元来は中尊寺一切経(清衡経)の僚巻であったと考えられる。

中尊寺一切経(清衡経)は奥州藤原氏初代、清衡(1056~1128)が天治3年(1126)3月24日に建立供養した関山中尊寺に奉納されたもので、その供養願文には「右経巻者金銀字挟一行而交光、紺紙玉軸合衆宝而成巻」と本一切経の様式が記されている。紺紙金銀字交書経の先例としては尾道の転法輪山大乗律院荘厳浄土寺や五島美術館、比叡山延暦寺に金銀字法華経(いずれも重要文化財)が伝存しているが、一切経に関しては慈覚大師円仁(794~864)の『入唐求法巡礼行記』に五台山経蔵閣所蔵の一切経について「大蔵経六千余巻、惣是碧紙金銀字、白檀玉牙軸」との記録がみられるだけであり、実際の遺例としては他に類を見ない稀有なものである。

さて、余りの優美さ故外観ばかりに目を奪われがちであるが、次にその本文に言及したい。本巻は今日最も一般的に使用されている漢訳大蔵経のテキストである『大正新脩大蔵経』第47巻所収のものとは異なる本文形態を有している。本誌表紙、並びに上段掲載の写真に瞭然のよう、本巻には細字双行書きが多用されているが、宋版(磧砂版)を始め金版(趙城蔵)、高麗版(再雕本)等において当該箇所は何れも通常の本文として刻字されている。

また異なるのは表記法だけではない。上記3種版本、並びに名古屋市稲園山長福寺(七寺)蔵本(平安末期写。北宋勅版系統)との対照結果、その本文は何れとも一致をみない。一々の相違について言及は避けるが、主立ったものとして「南無」の有無があげられる。

『往生礼讃偈』、『集諸経礼懺儀』巻下では日没礼讃を除く初夜・中夜・後夜・晨朝・日中の各礼讃において、「至心帰命礼西方阿弥陀仏　〔偈文〕　願共諸衆生　往生安楽国」という定型表現が復誦されるが、檀王法林寺蔵本には「南無至心帰命礼……」とその冒頭に「南無」の2字が付加されている。

一切経書写の過程において通常表記である本文の一部を細字双行に改めることは到底考えられず、「南無」の有無に代表される本文の相異からすれば本巻が版本大蔵経本とは異なる存在であることは明らかであるが、これは何も檀王法林寺蔵本のみの破格ではない。河内長野市天野山金剛寺に蔵される鎌倉中期写本にも同様の特色がみられることより、細字双行表記の多用、南無の付加といった特色を有する系譜が版本大蔵経系統とは別個に存在していたことが看取される。

中尊寺経(清衡経)は北宋勅版(蜀版)の刊記が転写されている経巻が散見することより、従来北宋勅版もしくはその転写本を底本としたものとみなされてきたが、近年の研究により則天文字や避諱欠筆の用いられるもの等、唐本系の系譜に連なる経典の存在が明らかになっており、更に同系統本の蔵される天野山金剛寺一切経からも唐本系テキストの発見が報告されていることを勘案するならば、檀王法林寺蔵本の系譜も唐代写経に連なる蓋然性が高く、『往生礼讃偈』の古態、並びにその変遷を考究していく上で本巻の文献学的価値は極めて高いと言える。

【附記】

本巻を現在に伝えられた檀王法林寺歴代住持、並びに閲覧の機会を賜りました信ヶ原雅文住職、閲覧に当たり御高配賜りました京都国立博物館赤尾栄慶先生、並びに御当局に厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

科研報告書『金剛峯寺蔵中尊寺経を中心とした中尊寺経に関する総合研究』(研究代表者上山春平、1990年)
科研報告書『中尊寺金銀字経に関する総合的研究』(研究代表者藤澤令夫、1997年)
科研報告書『中尊寺経を中心とした平安時代の装飾経に関する総合的研究』(研究代表者興膳宏、2005年)
科研報告書『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』(研究代表者落合俊典、2007年)

(中国政府奨学金高級進修生(中国人民大学))

寺院紹介

檀王法林寺

一切経を蒐集した袋中ゆかりの名刹

檀王法林寺は、京都市の京阪三条駅の北側すぐのところにある浄土宗の寺院で、正式には「朝陽山梅檀王院無上法林寺」と言います。

浄土宗寺院としての歴史は、文永9年（1272）に、浄土宗僧侶の望西楼了慧道光（1243～1330）が、天台宗寺院の「蓮華蔵寺」を浄土宗寺院「悟真寺」と改めたことに始まります。その後一時、応仁の乱などで廃寺となりましたが、慶長16年（1611）、袋中良定（1552～1639）が「檀王法林寺」として復興しました。袋中は琉球へ渡ったことで有名な僧侶です。その後、その弟子である團王により基礎が築かれました。

境内には、四天王立像を安置する楼門、「派祖望西楼」の石碑、袋中筆の名号を刻印した「南无阿弥陀仏」の巨大な石碑（写真右端）、そして袋中の御廟などがあります。

檀王法林寺には、貴重な什物が残されています。奈良朝写経である『七知経』（重要文化財）を初め、『頻毘娑羅王詣仏供養経』、『集諸経礼懺儀』などです。『集諸経礼懺儀』は、紺紙金銀泥の写経で、もともとは中尊寺一切経中にあったものです。詳しくは本誌7・8頁で説明しています。

袋中の一切経蒐集と檀王法林寺

袋中は、江戸時代初期の浄土宗名越派の学僧です。天正21年（1552）、現在の福島県いわき市に生まれました。袋中の兄は浄土宗捨世派の以八（1538～1614）です。慶長8年（1603）、渡海して琉球に至りました。3年間の滞在の後、本土に戻り、京都の木幡浄土寺に住持し、その後檀王法林寺を再興しました。また、元和5年（1619）には袋中庵を開いています。そして、元和8年に南都へ移住した時、降魔山善光院念仏寺を草創し、そこに経蔵を建立しました。その後、瓶原（現在の京都府木津川市）に拠点を置き、弟子たちとともに各地で一切経を蒐集しました。取得できなかった分については自ら書写して、念仏寺の経蔵に納めました。これが袋中蒐集一切経です。

残念ながら、現在、念仏寺には経蔵は残るものの、一切経はほぼ全て散逸し、数点を残すのみです。散逸した経典には、日本を離れて、遠くイギリスやアメリカまで流出してしまったものもあり、世界各地にその所在が確認できます。

檀王法林寺の什物として挙げた『頻毘娑羅王詣仏供養経』の巻尾には以下のような袋中の奥書があります。「此頻毘娑羅詣佛經一卷者／光明皇后玉筆委見末書本南都西大寺／法塔院安之紛失而入我手令珍重而／奉納三條法林寺函中矣可永守護備／寺□賓者也／團王老能住持正□／寛永三丙寅正月廿五日云尓／山州相樂郡瓶原山居／弁蓮社袋中良定（花押）」。そこから、瓶原時代に袋中が本経を取得し、後に檀王法林寺の寺宝となったことがわかります。奥書にも記載がありますが、この『頻毘娑羅王詣仏供養経』は光明皇后願経とされ、非常に貴重な古写経です。浄土宗の総本山知恩院所蔵の古写経で国宝となっている『菩薩処胎経』や重要文化財の『瑜伽師地論』は、袋中が蒐集したもののようです。そのように炯眼のあった袋中の蒐集した貴重な経典の内のいくつかが、檀王法林寺にも残されているのです。

（三宅徹誠）

檀王法林寺・本堂

古写経紹介・その三

世界最古の写本が京都興聖寺に

現存最古の大唐西域記写本

高田時雄

厳しい残暑の残る八月の末、京都は堀川寺ノ内にある古刹興聖寺で大唐西域記の古写本を見ることが出来た。これまでその存在だけは聞き知っていたが、不幸にして眼福を得る機会がなかった天下の至宝である。今回それが可能となったのは、本研究プログラムの落合教授のお勧めで、同寺所蔵一切経の調査及び写真撮影に臨時参加を許されたからである。小文ではその折りの見聞を基礎として、若干の知見を書き記しておきたい。[1]

興聖寺の大唐西域記は全十二巻完具しているが、すべてが同時代の写本なのではない。後世の補写を含んでいて、各巻のあいだにはかなり大きな年代の開きがある。そこで年代の分かる識語を列挙すると、以下のようになる。

第一巻「延暦四年（七八五）七月書寫蓮慶」

第二巻「仁安二年（一一六七）二月七日書了／求菩薩沙門信西」

第四巻「仁安二年（一一六七）歳次丁亥二月五日／求菩薩沙門寛盛書」

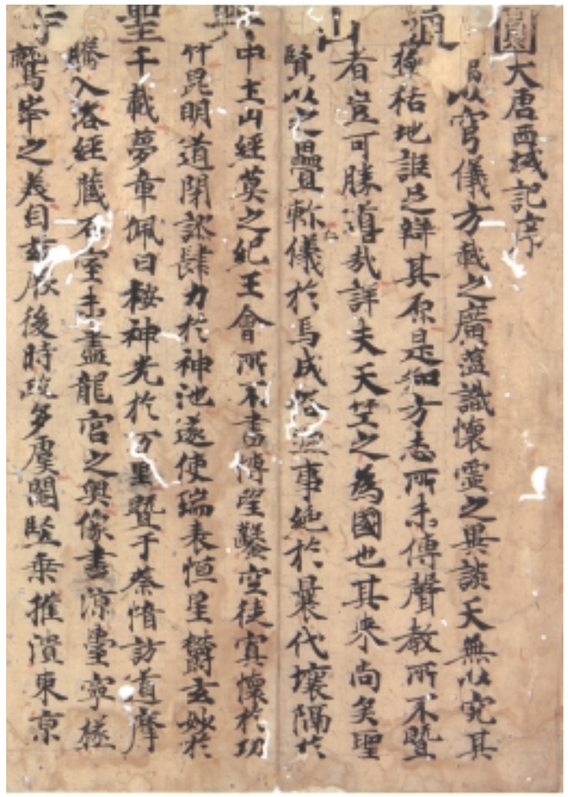
第六巻「嘉吉二年（一四四二）四月七日借筆於白蹈聖人令書藏内之闕者也」

このうち第六巻は巻首に「轉六」の千字文番号があり、また巻末には字音が付されているので、刊本の大蔵経（おそらく思溪版）から写したものであることが分かる。

また第十二巻は各種の訓点や仮名が施されているため、訓点資料として早くから国語学者による研究が行われてきており、識語こそないもののその書写年代は承和十一年（八四四）以後、おそらくは天暦頃（九四七～九五六）のものと考えられている。というのは巻末に近い箇所の紙背に承和十一年三月二十三日付けの中臣由多気の出挙稲返納の解文が書かれているが、それは西域記の書写の際、偶々用紙が足りなかったかなにかして、その解文の反故を再利用したものと見られるからである。[2] 要するに第一巻と第十二巻が古く、わけても第一巻は群を抜いて古い写本ということになる。もっとも第一巻の識語については本文とは別筆ということもあり疑いも存するようだが、[3] 偶々調査に同行された古写経の専門家である京都国立博物館の赤尾栄慶氏によれば、写本の外見や字様の特徴は、この年代のものと考えて特におかしな点はないということであった。反対に、この識語の年代を否定しようとすれば、より具体的な根拠が必要であろう。ひとまず我々はその年代を認めておきたいと考える。

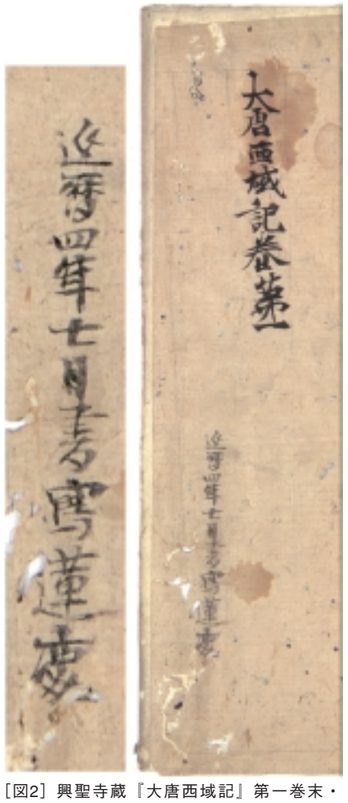
さてその第一巻は高さ約二七センチ、幅五五センチの料紙十六枚を貼り継いだ写本で、天地及び毎行に界線が施されている。界高は二四・三センチ、毎行の字数は二十字から二十五字で一定しない。もと巻子本であったものを折帖に改装してあるが、この第一巻は他の諸巻に比べて少し背が高くなっている。ちなみに紙背の解文の上下が欠けているのは、おそらく改装時に切断されたものと見られるが、そうすると本来の巻子の紙高はさらに大きかったということになる。こういった外見の特徴もこの第一巻が特別なものであることを感じさせる。

日本に現存する大唐西域記の古写本は、これまで既知のものとして他に（一）京都国立博物館所蔵康和四年（一一〇二）書写本（巻一のみ、守屋孝蔵旧蔵本）、（二）法隆寺に所蔵される大治元年（一一二六）加点本（巻二と巻十二を欠く）[4]、（三）大谷大学所蔵の大治本（巻二、即ち上記法隆寺本に欠けた部分に当たる。神田喜一郎旧蔵）、（四）石山寺所蔵の長寛元年（一一六三）移点本（巻一より巻八、巻九以下は刊本より写したもの）、（五）醍醐三宝院所蔵の建保二年（一二一四）書写本（巻十一、巻十二のみ）、（六）京都大学人文科学研究



［図1］興聖寺蔵『大唐西域記』第一巻・序

所所蔵の橘寺本（松本文三郎旧蔵で、十二巻完具）、（七）東京国立博物館所蔵で紺紙金銀字のいわゆる中尊寺経（大正蔵にいう松本初子所蔵本）などがある。これらのテキストは（一）（二）を除き、多少の違いはあってもこれまで西域記テキストの校勘に利用されてきた。[5] さらに近年の調査によって利用可能になったものに名古屋大須の七寺本、大阪河内の金剛寺本（巻一、巻十を欠く）があり、落合教授のプロジェクトによって撮影された鮮明な画像を国際仏教学大学院大学で見ることが出来る。近年、唐代の標準的蔵経テキストを忠実に保存するものとして日本の奈良平安朝書写仏典の価値が大きく再評価されつつあるが、西域記についてもオリジナルのテキストを復元する上でこれらの古写テキストがきわめて重要な役割を果たすものであることは言うまでもない。今や日本古写経のテキストを全面的に利用する時期に来ているといえよう。その意味で一段と古い興聖寺本の意味は小さくないはずである。



［図2］興聖寺蔵『大唐西域記』第一巻末・識語とその拡大写真（左）

ところで敦煌吐魯番写本中にも西域記の残巻が存在する。敦煌本としてはS.2659Va（首欠、巻一の大部分）、P.3814（巻二の後半約三分の一）、S.958（巻三の巻首、十数行のみ）が知られている。[6] そのうち第一のものは同光二年（九二四）三月にインドへの求法の旅から帰った鄜州開元寺の僧智厳がその旅のあいだ携帯していた写本である。[7] 他の二種については書写年代を知り得ないが、文字や写本の外形的特徴から見て、早くても九世紀をさかのぼることはないように思われる。とすれば興聖寺の西域記第一巻は紛れもなく現存する最古の写本ということが出来るのである。

筆者は、さっそく試みに大唐西域記第一巻について、興聖寺本を他の日本古写本及び敦煌本と比較してみた。そして幾つかの重要な点において、高麗蔵本をはじめとする大蔵経諸本との際だった違いを見いだすことが出来た。しかもその違いはこれらの写本間では著しい一致を示している。残念ながら与えられた紙数の関係で、ここではそれらについて詳しく述べることが出来ない。しかし西域記テキストの再構に興聖寺本をはじめとする古写本の利用が欠かせないことは明白になったと思う。

【註】

（1）当日便宜を供与された長門玄晃住職にお礼申し上げるとともに、興聖寺の経巻については、すでに詳細な『興聖寺一切経調査報告書』（京都府教育委員会、一九九七年）があることを付記しておきたい。

（2）吉沢義則「濁点源流考」『国語国文』六、七号。後、『国語説鈴』（東京、立命館出版部、一九三一年）に再録、その二八九～二九〇頁。また吉田金彦「訓点拾遺五題」『訓点語と訓点資料』第十一輯、四七五頁、曽田文雄「興聖寺本大唐西域記巻第十二の朱点」同上、四八六～四八七頁を参照。

（3）吉田金彦、上掲論文、四七四頁。

（4）春日礼智「日本現存支那仏教史籍古鈔古刊本目録」（『日華仏教研究会年報』六、昭和十八年九月）及び大谷大学東洋史学文学支那学研究室編「東洋学関係仏典目録」『大谷学報』二九-一（一九四九）はこの写本を「延暦四年（七八五）書写、大治元年（一一二六）寫點了」とするが、おそらくこの本が出展された時の目録『第十回大蔵会陳列目録』の記述を読み違えたことに帰因する誤りであり、実際に写本に拠ったものではないと思われる。

（5）近代の西域記校訂本の代表的なものとして以下の四種を挙げることができる。（一）『大唐西域記、同考異索引』、京都帝国大学文科大学叢書第一、明治四十四年（一九一一）刊、（二）『大正新脩大蔵経』第五十一巻史伝部三所収本、一九二八年刊、（三）『大唐西域記』章巽校点本、一九七七年上海人民出版社刊、（四）季羨林等『大唐西域記校注』、一九八五年中華書局刊。

（6）これらは向達『大唐西域記古本三種』（中華書局一九八一年刊）に収録されていて、簡単に見ることが出来る。吐魯番本は僅か十行ほどの小断片で、巻七の部分であるが、破損が激しくテキストの校勘には役立たない。柳洪亮「『大唐西域記』伝入西域的年代及其有関問題」『新出吐魯番文書及其研究』（新疆人民出版社、一九九七年刊）三七二～三八一頁を参照。

（7）栄新江「敦煌文獻所見晚唐五代宋初的中印文化交往」『季羨林教授八十華誕紀年論文集』（江西人民出版社、一九九一年刊）、（下）九五六～九五七頁。なお P.2700bis（Recto）はこの写本の更に前、第一巻の目録部分に当たる断片である。これまで言及がないので、この場を借りて補足しておく。

【執筆者紹介】
高田　時雄（たかた　ときお）
大阪市に生まれる。京都大学文学部卒業後、同文学研究科で中国語史を専攻。七十年代後半、フランス社会科学高等研究院に在籍し、仏英の敦煌写本を調査。現在、京都大学人文科学研究所教授。主たる研究対象は敦煌写本の言語史的研究。

活動記録

国際シンポジウム

海外の研究者とともに漢訳仏典について考究

平成18年度は国際シンポジウムを開催した。日時、講演者及び講演題目などについては次の通りである。

テーマ「漢訳仏典研究の新たな展開」
平成18年12月2日（土）午後1時30分～5時
於 泉ガーデン・コンフェレンスセンター

C・ウィレメン（ベルギー　王立海外研究アカデミー会員）
「ダルマパダの漢訳諸本について」
K・L・ダンマジョーティ（中国　香港大学教授）
「漢訳『法句経』原典の言語とその部派帰属について」
今西順吉（日本　国際仏教学大学院大学教授）
「金剛寺本阿含経について」
L・シュミットハウゼン（ドイツ　ハンブルグ大学名誉教授）
「『楞伽経』第八章に関する文献学的所見」

ウィレメン氏とダンマジョーティ氏は、『法句経』について論じられた。ウィレメン氏は、ダルマパダの漢訳諸本と説一切有部の発展との関わりについて述べられた。『出曜経』は、譬喩者のダルマトラータ（紀元後2世紀）が十二部から成る雑蔵を編纂した内の第6番目に相当するウダーナであり、その経の偈は『ウダーナヴァルガ』に一致する。『法集要頌経』は、その経題が『ウダーナヴァルガ』の訳によく一致し、根本説一切有部に属すると推定される。根本説一切有部とは、譬喩者が継続発展したものとするのが妥当である。中央アジアのスバシ写本をはじめとする梵本の『ウダーナヴァルガ』梵文写本については、それらが北西インドにおける説一切有部の発展をよく反映しているとされた。

ダンマジョーティ氏は、漢訳『法句経』の原典の言語とそれが帰属する部派の問題について見解を述べられた。従来、漢訳『法句経』はパーリ本の翻訳であるとされてきた。しかし、漢訳とパーリ本とは、構成や内容面では近いものの、両者の間には明確に矛盾する証拠もたくさん見られる。例えば、第一偈は、漢訳とパーリ本とがそれぞれ異なる伝承に属していたことの有力な証拠となる。更に、漢訳の数箇所は、漢訳の原典がパーリ語ではなくてプラークリット語であったことを示唆しており、少なくともそれらの箇所は現在の上座部『ダンマパダ』に使われているパーリ語ではないことは確実である、と講演された。

左より、今西、シュミットハウゼン、ダンマジョーティ、ウィレメンの各氏

今西氏は、金剛寺蔵の『増一阿含経』について発表された。『増一阿含経』は高麗蔵本では52品51巻であるが、金剛寺本では51品50巻である。金剛寺本の巻数が少ないのは、通常巻第二となるものが巻第一に含まれているからでその点は聖語蔵本でも同様である。よって、金剛寺本は奈良朝写経の転写本であることが類推される。また、金剛寺本・聖語蔵本・高麗蔵本には、共通する脱漏部分があり、一方、聖語蔵本のみに見られる脱漏部分も存する。しかし、その多くは日本に伝来する以前の早い時期に生じたものであろうとされた。

シュミットハウゼン氏は、『楞伽経』第8章「肉食に関する章」の梵本校訂を行ったことについて述べられた。梵本校訂は、かつて南條文雄氏によってなされたが、それは数本の写本に依ったのみであり不完全であった。そこで、氏は新たに約20本の写本を入手し校訂を試みられた。チベット訳や求那跋陀羅訳をはじめとする諸漢訳を踏まえて、梵本の正しい読みの復元を行い、本来の梵本テキストの構築に成功された。そこで、校訂された文章を数例挙げて具体的に説明された。

以上4名の講演の後、参加者から質問が寄せられ、シュミットハウゼン氏が丁寧に答えられた。会場では、『玄応撰一切経音義二十五巻』などの学術フロンティアの出版物や金剛寺蔵『維摩詰所説経』のレプリカなどを展示し、成果を紹介した。閉会後は、当日の参加者全員に、金剛寺蔵『維摩詰所説経』の画像などを含むCDを配布した。

今年度の公開シンポジウムについては、次号に掲載する予定である。

日台共同ワークショップ

日本と台湾の研究者の交流を図る

平成19年度は、新たな試みとして、京都大学人文科学研究所の21世紀COEと台湾の南華大学と共同で、2007年日台共同ワークショップを開催した。今年度は、東京と京都の2会場において6つのセッションに分けて討論を行った。詳細については以下の通りである。

テーマ「仏教文献と文学」
○東京会場
平成19年6月1日（金）午前10～午後5時
於 国際仏教学大学院大学

開会式では、南華大学の鄭阿財教授へ、本学学術フロンティア代表の今西順吉教授より学術フロンティアの刊行物が、また京都大学人文科学研究所21世紀COE代表の高田時雄教授より21世紀COEの刊行物が、それぞれ贈呈された。

各セッションのテーマ・発表者・発表題目等に関しては以下の通りである。

会場の様子

東京会場・第１セッション、本井牧子氏（右）と宮井里佳氏

第１セッション　『金蔵論』研究の最前線

本井牧子（京都大学非常勤講師）
「日本における『金蔵論』」
宮井里佳（埼玉工業大学准教授）
「中国仏教類書と『金蔵論』」

第２セッション　仏教説話をめぐって

梁　麗玲（銘伝大学助理教授）
「仏典に見える『雁銜亀』説話の伝播と影響」
三宅徹誠（国際仏教学大学院大学附置国際仏教学研究所非常勤研究員）
「『賢愚経』諸本比較研究―敦煌本と日本古写経本を中心に―」

第３セッション　一切経の諸相

王　丁（日本学術振興会外国人特別研究員）
「西域出土の『開宝蔵』断簡初論」
落合俊典（国際仏教学大学院大学教授）
「日本古写一切経中の唯識二十論後序」

本井氏と宮井氏は、中国北朝末期に編纂された『金蔵論』についてそれぞれの視点から考察された。本井氏は、因縁譚の集成という性格に着目された。善因善果を説く因縁譚をコンパクトにまとめた形は、日本においても唱導に用いやすく、更に説話集編纂に影響を与えていったと述べられた。宮井氏は、当時は百科辞典的な分類を目的とする一般的な「類書」が多く編纂された時代であるが、『金蔵論』は因縁譚に限った分野の類書であり、内容・構成から見て仏教教導の書という特徴を持つと説かれた。

梁氏は、仏典に見える「雁銜亀」説話について詳しく分析された。「雁銜亀」は、鳥が亀を銜えて飛んでいくが、途中で口を開いたため落としてしまうという話である。仏典のみならず、寧夏や青海など中国各地の民間伝承にも言及され、本説話の伝播と影響について述べられた。三宅氏は、梁氏も研究されている『賢愚経』について、日本古写経本や敦煌写本などの諸本を比較し、『賢愚経』所載の説話の配列の相違などから、日本古写経本の祖本が6世紀頃まで遡ることを明らかにされた。

王氏は、10世紀後半に開版された開宝蔵一切経版本の、世界各国に現存する残簡について分析された。その中で、近年新たに比定されたドイツのトルファン探検隊将来本を図版を用いて紹介された。落合氏は、『唯識二十論』の後序が、高麗蔵や宋元明版にはないが、七寺本と敦煌本（P.2155）とに存することに着目され、『慧琳音義』に引かれる後序の語彙の説明などを用いて、詳しく分析された。

梁氏が発表の時に日本語で自己紹介されるなど和やかな雰囲気の中、参加された多くの研究者と活発な論議が交わされ盛会に終わった。

○京都会場
平成19年6月3日(日)午前10～午後5時
於 京大会館

まず、台湾・南華大学の釈依空師より式辞が述べられ、その後、本学落合俊典教授より東京会場の報告が行われた。京都会場でのセッションの詳細は以下の通りである。

第４セッション　文学をめぐって

牧野和夫（実践女子大学教授）
「日本に舶載された『孔子童子問答話』に関する二、三の問題」
釈依空（南華大学教授）
「『西遊記』における仏教的主題の研究」

第５セッション　禅宗文献

蔡　栄婷（中正大学教授）
「北宋禅宗における『讃』の変遷と発展」
汪　娟（銘伝大学助理教授）
「敦煌本『秀禅師七礼』」

第６セッション　唐代の仏教文献

鄭　阿財（南華大学教授）

京都会場・式辞を述べられる釈依空師

「敦煌仏教文献の伝播と仏教文学の発展についての考察―『法苑珠林』『諸経要集』を中心として」
高田時雄（京都大学教授）
「『大唐三蔵玄奘法師表啓』に関する一問題」

牧野氏は、「孔子童子問答話」について、特に、敦煌写本P.2524墳墓壁画図に「推蒲輪」とある箇所が、『玉燭宝典』所引の「嵇康撰高士伝」には「推蒲車」とある点に着目し論を展開された。釈依空師は、『西遊記』中に『法華経』『般若心経』などの仏典が挙げられることに関して詳しく分析された。

蔡氏は、仏典における讃について説明された後、北宋期の禅宗の讃を分析し、その作者や内容や他への影響などについて考察された。汪氏は、敦煌写本中に伝わる２本の『秀禅七師礼』に関して、本文校訂の結果を報告され、内容を分析し思想面について考察された。

鄭氏は、『法苑珠林』などの類書が敦煌における仏教文献に多大な影響を与えたことについて論じられた。本井・宮井両氏が論じた『金蔵論』も中国と日本の仏教文学の発展に影響を与えた点に意義があると述べられ、三者を中心に活発な討論がなされた。高田氏は、『大唐三蔵玄奘法師表啓』には唐の太宗が長命婆羅門に宛てた書があるが、長命婆羅門とは唐がインドの内紛に関わった時に連れ帰った方士那羅邇娑婆寐（ナラーヤナ・スヴァーミン）であると指摘され、彼と玄奘との関わりを解明された。

京都会場では、中国語での論議も活発になされ、まさに日台の学術的交流が深まったワークショップとなった。

来年度は、台湾で日台共同ワークショップを開催する予定である。

公開研究会

古写経研究の最先端

昨年度第３回、及び今年度第１回・第２回公開研究会について報告する。全て本学において開催された。日時・発表者・発表題目、及び詳細については次の通りである。

○平成18年度第３回公開研究会
平成18年11月18日(土)午後3～5時

青木進（国際仏教学大学院大学学術フロンティア研究員）
「『木槌子経』と『木槌経』」
林寺正俊（国際仏教学大学院大学学術フロンティア研究員）
「日本古写経中の『五王経』について」
木村清孝（国際仏教学大学院大学教授）
「金剛寺本『大乗起信論』の思想的特徴について」

青木氏は、七寺本『貞元新定釈教目録』に、ほぼ同内容にもかかわらず３種が掲載されている『木槌子経』類について考察された。林寺氏は、『五王経』の内容について、日本古写経本と大正蔵本との相違に着目し検討された。木村氏は、金剛寺本『大乗起信論』の加点に基づく読みから、中古・中世日本における特徴的な理解に言及された。

木村清孝教授

林寺正俊研究員

○平成19年度第１回公開研究会
平成19年5月26日(土)午後3～5時

上杉智英（国際仏教学大学院大学学術フロンティア研究補助員）
「檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』について」
林寺正俊（国際仏教学大学院大学学術フロンティア研究員）
「『三法度論』は誰が訳したのか？―新出資料に基づく訳者考―」
米田真理子（大阪大学非常勤講師）
「千代野物語と三つの井戸―京都・鎌倉・岐阜をむすぶもの」

上杉氏は、檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』巻下は荒川経と考えられてきたが、実際には中尊寺経であることを明らかにし、『往生礼讃偈』研究における本経典の意義について述べられた。林寺氏は、『三法度論』の冒頭部分が、日本古写経本と諸版本とで異なること、訳者名についても、僧伽提婆・慧遠、僧伽提婆・道安といった記載の相違があることについて考察された。米田氏は、『千代野物語』の原型と言える金剛寺蔵『憂喜餘の友』をもとに、本物語の成立と展開について分析された。

○平成19年度第２回公開研究会
平成19年10月13日(土)午後3～5時

佐藤もな（国際仏教学大学院大学学術フロンティア研究員）
「院政期書写の『五百問事経』について―金剛寺本の意義」
池平紀子（大阪市立大学非常勤講師）
「中国北魏撰述の『提謂経』と仏・道の神々」
牧野和夫（実践女子大学教授）
「書写一切経と宋刊一切経―ひとつのケースを軸に―」

佐藤氏は、院政期書写と思われる金剛寺本『五百問事経』に関して、七寺一切経や諸版本と比較され、また金剛寺本に付加されたヲコト点について触れられた。池平氏は、疑経である『提謂経』に見られる中国固有思想、特に二十五戒神に関して、その特徴や他の仏教・道教文献に見られる戒神との関わりを述べられた。牧野氏は、色定法師書写一切経の底本は博多の宋人将来の宋版一切経であるが、その底本が知恩院蔵宋版一切経であることを明らかにされた。

今年度第３回公開研究会の報告については、次号に掲載する予定である。

出版物紹介

○日本古写経善本叢刊第３輯（近刊）
『長寛三年写観無量寿経・保延四年写無量寿経論註巻下』
院政期浄土教の理解を示す古写本

第３輯では、金剛寺所蔵の浄土教経論を取り上げる。長寛３年（１１６５）写の『観無量寿経』と保延４年（１１３８）写の『無量寿経論註』巻下である。

『観無量寿経』の平安時代以前の古写本は装飾経を除いてあまり知られていない。金剛寺本が書写された長寛３年は、浄土宗の開祖であり、『観無量寿経』及び『無量寿経』『阿弥陀経』を「浄土三部経」と定めた法然（１１３３～１２１２）在世時に当たる。金剛寺本には、主に10～11世紀の叡山で用いられたというヲコト点（朱点、天爾波留（てにはる）点（別流））が付けられており、叡山浄土教の訓法を知ることができる。また、墨点も付けられているが、これは朱点と重なる部分を持つ一方、別の訓法・異文も多く伝えている。本書では、影印をフルカラーで示した上で、朱点と墨点それぞれによる訓読文を掲載する。また、経典本文は、宋版や高麗版など版本の系統とは異なり、古い姿を伝えている。本文の校異表の掲載によってそれを示す。

曇鸞（４７６～５４２）の著書である『無量寿経論註』の古写本は、保延４年の書写であり、現存する最古のものである。また、ほぼ全文にわたって朱書による訓点が加えられている。重要文化財である西本願寺蔵親鸞加点版本『無量寿経論註』上下巻は建長８年（１２５６）の加点であるが、金剛寺本はそれより約１２０年遡る。ヲコト点はほとんどないが、送り仮名や返り点は多く付されており、当時の『無量寿経論註』に対する理解が読み解ける。本書では、その訓点に基づいた訓読文を掲載する。

以上２本の浄土教文献は、平安時代末期にどのように浄土教が理解されていたかを知る上で非常に貴重な資料と言える。その資料の影印を公開すると共に、仏教学・国語学の両面から見た解題・研究論文を掲載する。